

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』

東坡先生詩』の書誌的考察

——東坡詩の抄物の受容と展開の一例——

山 本 佐和子

はじめに

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』（全二五卷二八冊）は、蘇軾（字子瞻、号東坡、1037-1101）の詩（東坡詩）の諸本・諸注の中で最も流布した「王状元集注本」の元代の刊本であり、日本に齎された後、五山寺院内で訓点とカタカナによる注釈が稠密に書き入れられた本（書入れ仮名抄）である。

漢籍受容や抄物の研究で従来から言及されているが、必ずしも注目されてきたわけではない⁽¹⁾。「王状元集注本」は宋代に版行されたもので、日本にも宋版が伝存する。本書は元代に下るもので、民間の書肆が版行した坊刻本である（西野一九六四）。また、抄物（室町期に多く作られた漢文に対する日本語・片仮名書きによる注釈書）のうち、

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』の書誌的考察

原典に抄文（注釈の文章）を直接書きこむ「書入れ仮名抄」（柳田一九九八）の一つだが、書き入れられた抄文は、先行する著名な東坡詩の抄物「四河入海」の記述を出るものではないという指摘がある（堀川二〇一五）⁽²⁾。

一方で、本書はほぼ全巻・全詩にわたって朱・墨による稠密な訓点が付されており、本書の伝来の過程からして、この訓点は、五山における東坡詩の訓読法とその伝授の様相を伝えるものである可能性が高い。また、仮名抄は抄物の中では時代が下るため、語彙・語法に他の抄物には殆ど見られないものが含まれる。

元刊本は、仮名抄文を書き入れた文英清韓（？）元和七（一六二一）年頃）が伝領した段階で相当劣化が進んでいたようで、一部、本文を補写したり、匡郭内を切り抜いて別紙に貼り付けたりした冊があるのは傷みが激しかったためだと思われる。このままでは、訓点・仮名抄共に判読できなくなる恐れがある。

本研究では、当該資料の重要性和資料の現状に鑑み、本稿では、当該資料の書誌的特徴を報告し、今後、仮名抄文を翻刻していくことにしたい。

一 書誌

資料名 大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』（貴重書No.64、請求記号…甲漢21）
種類 元刊本（一部、別種の元刊本、及び、五山版と補写を含む）、書入れ仮名抄

形態 袋綴じ、二八冊（目録一冊、全二五巻、卷一八・一九各二分冊）

表紙 改装浅黄色無地表紙

料紙 楮紙、総裏打ち

法量 改装後外寸 縦二五・七糎 横一五・七糎

〔元刊本〕 縦二四・〇〇二四・三糎 横一四・五糎

〔五山版〕 縦二四・二糎 横一四・四糎

外題 改装表紙打ち付け「東坡」

内題 各冊「増刊校正王状元集註分類東坡先生詩卷之…」

匡郭 〔元刊本〕 四周双辺

縦二〇・〇〇二〇・三糎 横一二・六〇一二・九糎

〔五山版〕 左右双辺

縦一九・八〇二〇・〇糎 横一二・六〇一二・八糎

行数・字数 〔元刊本〕 一二行・二一字、小字双行二六字

〔五山版〕 一一行・一九字、小字双行二五字

柱記 〔元刊本〕 書名（坡詩）・卷数・丁数、版心黒口、黒魚尾

〔五山版〕 卷数・丁数、版心白口、黒魚尾

丁数（版本部分のみ） 総七五七丁

刊記 〔元刊本・五山版共〕 なし

奥書・識語（書入れ仮名抄の書写者による識語）

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集註分類』東坡先生詩の書誌的考察

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩の書誌的考察

天正十三年（癸／酉）四月十九日始講 天正十九年（己／卯）四月二日成就也

愚十八歳也

二十四歳也

清韓拝

坡講伝受

蕉雨余滴

四河入海述之

○桃源

—— 一韓

—— 咲雲三和尚

—— 文叔彦和尚

清韓 二十五歳臘月／前板秉弘

（東坡先生詩^③・二五31才…【図1】）

印記（主に冊首）「天得菴」（朱陽長方五・六×二・〇糶、抹消）、「岸藩文庫」（朱陽長方四・五糶×三・八糶、取消

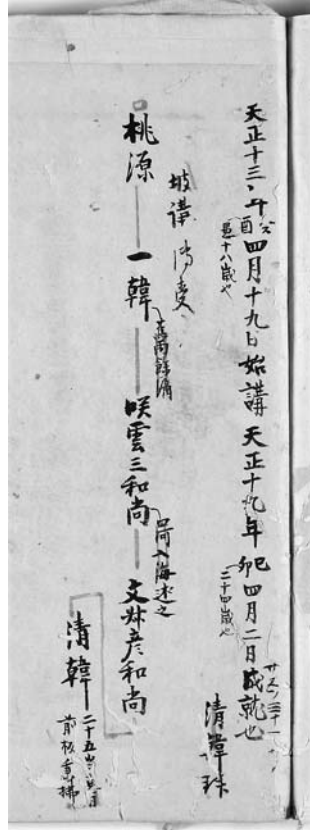
印）、その他、大阪府収蔵後の蔵書印二点（朱陽長方印）

備考

・卷一一・一六全巻と卷一五・一八下・一九下の一部が五山版。

・卷一九のみ、匡郭左右双辺、一一行・一九字の別種の元刊本。巻頭に、この巻のみ別種の蔵書印（鼎形陽二・八×

二・〇糶、詳細未詳）がある。



【図1】 卷25（第28冊）卷末（部分）：文英清韓による識語

二 先行研究——本資料と「四河入海」の関係

中世室町期の禅林では、東坡詩と山谷詩（黄庭堅の詩）が広く受容されていたことが知られている（芳賀一九五六）。両詩には多くの抄物が作られた。本資料には、五山における東坡詩の主な講師とその著作を列挙する書入れが認められる。

- (1) △日本坡詩講談師 双桂和尚、諱傳字惟肖号蕉雪始号樵雪 懶雲師、諱靈字嚴仲／
 北禅師諱鳳字瑞溪号刻楮子或号臥雲作「脛説」、大岳師作「翰苑遺芳」／
 万里居士述「天下白」、木蛇師諱派字江西作「天馬玉法」号統翠
 竹処師諱仙字桃源号卍庵或号春雨在山上講坡者全部／

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』の書誌的考察

諱翊字一韓坡之間抄号「蕉雨余滴」間桃翁所講也、桃翁或号蕉了、絶海和尚之后裔也、

(東坡先生詩・目錄41ウ【図2】、四河入海古活字版一ノ一序8ウにほぼ同文)

(1)は、「四河入海」諸本にもほぼ同文が見られ、目新しいものではない。(1)の記述自体も、本資料の伝来過程からすると、「四河入海」から転写された可能性がある。

東坡詩の抄物で、現在最もよく知られているのが「四河入海」(天文三(一五三四)年頃成立、全二五卷)である。この抄物は、笑雲清三(生没年不詳)が、瑞溪周鳳の「脞説」、大岳周崇の「翰苑遺芳」、一韓智翊の桃源瑞仙講の間書「蕉雨余滴」、万里集九の「天下白」を集めた編纂抄物(集成抄物)である。「四河入海」の成立や諸本については、鈴木(一九七六)に詳しい。「四河入海」には、主要な写本が、東福寺靈雲院と建仁寺両足院に伝存している。このうち、東福寺本は編纂者の笑雲清三の自筆本と考えられている。慶長頃版行の古活字版は、東福寺本を底本とする可能性が高いという。

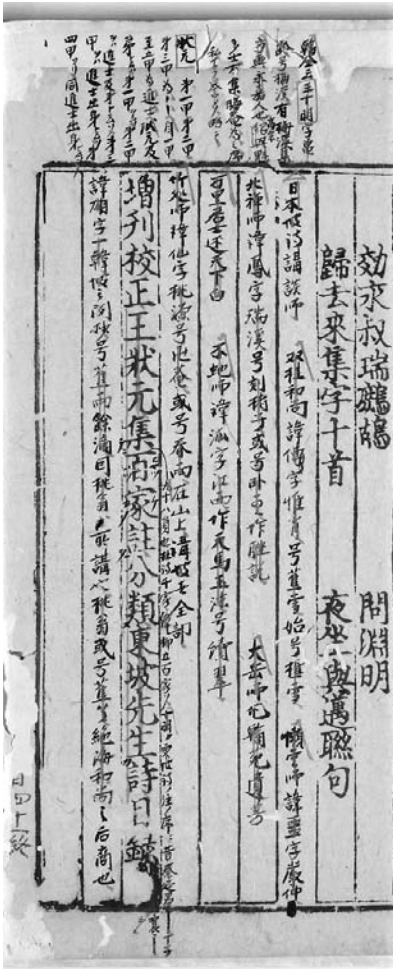
鈴木論文では、本資料と「四河入海」古活字版との関わりにも言及されている。先に掲げた第二五卷(第二八冊)の識語から、墨筆仮名書きの抄文は主に、文英清韓(???)元和七(一六二二)年、寛永頃)が師の文叔清彦から東坡詩を受講した際のものとして推測できる。鈴木論文によると、「四河入海」の版行には、その清韓の直弟子が関わっているという⁽⁴⁾。

また、本資料には、抹消されたあとがある「天得菴」の蔵書印が認められる。東福寺天得庵は、笑雲清三、文叔清彦、文英清韓が住した塔頭である⁽⁵⁾。

すなわち、本資料に詳細な仮名抄を書き入れた清韓は、「四河入海」の最良のテキスト(東福寺本)を手元に持

ついていた可能性が高い。学習のためとはいえ、どのような理由で極細字の仮名抄文（先行研究が、「四河入海」と重なる部分が多いと指摘する）を大量に筆録したのは今後検証されなければならない。

堀川（二〇一五）では、【図一】の識語から「桃源瑞仙に始まる『東坡詩』講義の正統を受け継いでいるという自負があることがわかる」と指摘される。加えて、本資料の、元刊本を懇切丁寧な修補し、訓点を加筆・修正してある状態からは、「正統を受け継ぐ」ことには、物質としての本を伝領することも含まれていたことが窺われる。本資料は、抄物とその元となる講義が、少なくともこの時期には伝授・伝領の対象となる性格を有していたことを示す。以下、本書の形態について気づいた点を述べる。



【図2】「目録」（第1冊）巻末（部分）：
「日本坡詩講談師」

三 本書の現状

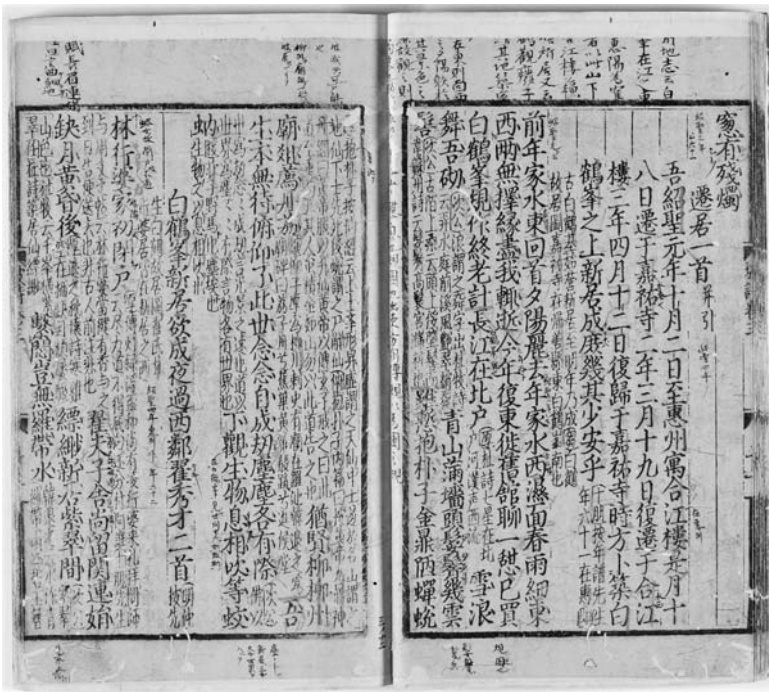
本資料の現状には、この本がどのように受け継がれてきたかを窺わせる特徴が散見される。おおよそ、出現順に指摘していくことにする。

(一) 清韓以前の書入れ

次頁の【図3】では、匡郭の外になされている漢文による書入れの文字の頭が切れている。これは、裏打ち後、化粧断ちした際に、書入れが断ち切られてしまったものと考えられる。この書入れは、本資料全体にある清韓の書入れより文字が秀麗で大きく、筆跡も異なっている。全て漢文である。この筆跡の書入れは本資料の前半部分で散見されるが、数は多くない。後にみるように、最初の裏打ちは、清韓の書入れ以前になされた痕跡があり、この書入れは、清韓が伝領する前に行われたものと考えられる。

(二) 五山版の補用・極細字の書入れ

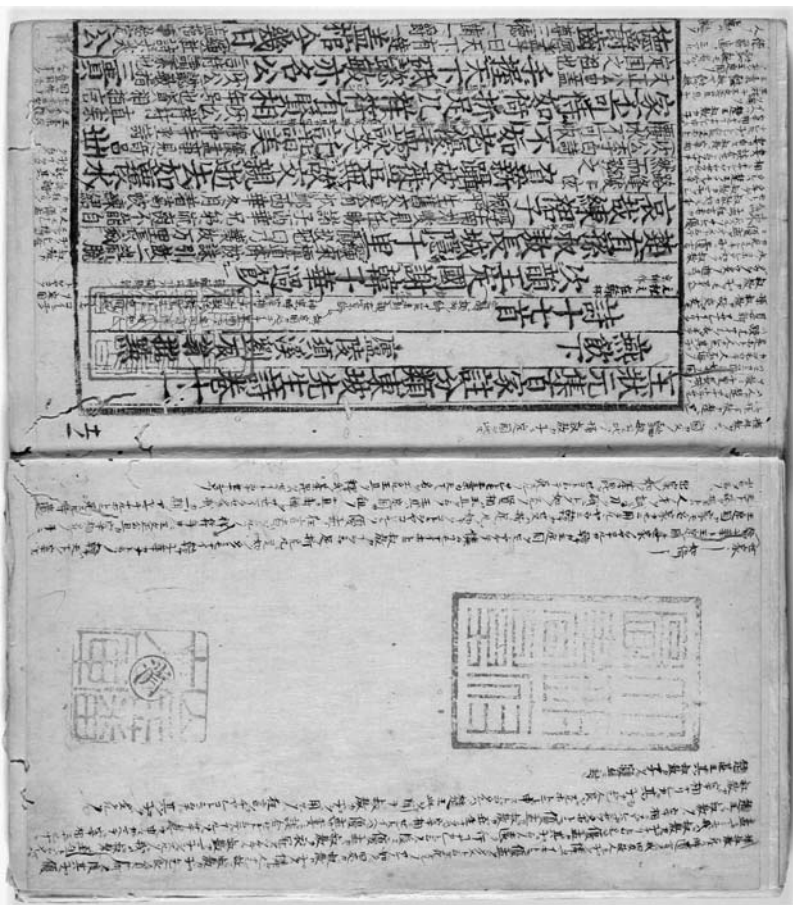
本資料は、全体は元刊本だが、巻一一（第12冊）・巻一六（第17冊）全巻と、巻一五（第16冊）、巻一八下（第20冊）、巻一九下（第22冊）のそれぞれ巻末数丁を五山版で補ってある。次々頁の【図4】は、巻一一の冒頭である。次々々頁の【図5】は、巻一九下の巻末近く、五山版を補入した後で元刊本に戻る箇所である。



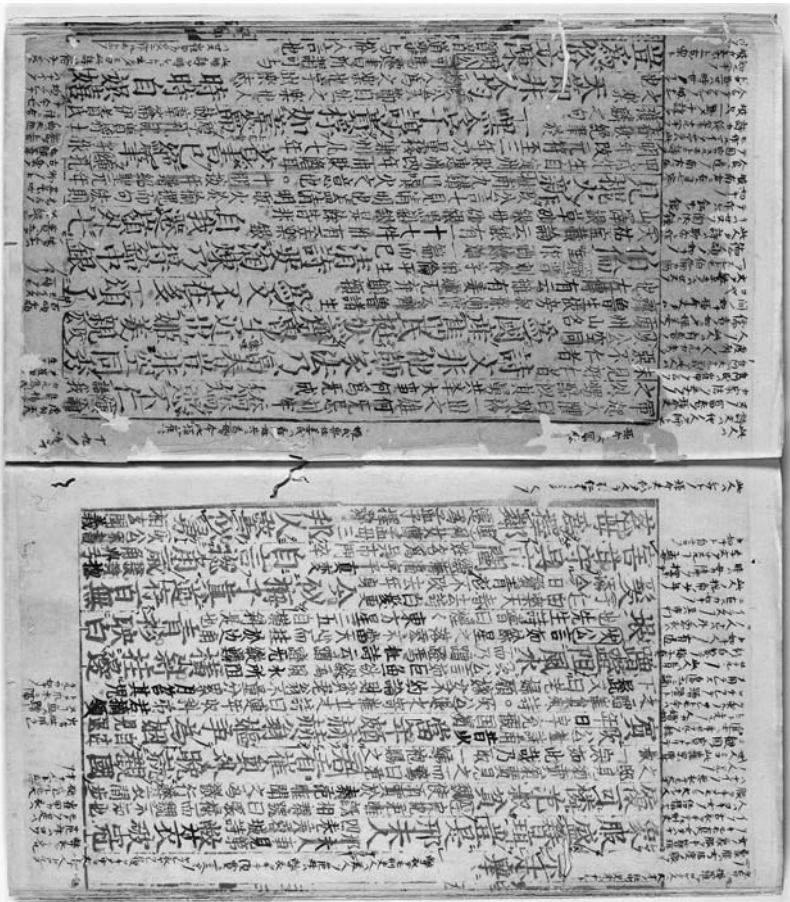
【図3（全体）】 卷三（第4冊）11ウ・12オ：清韓以前の書入れ

【図3（部分）】





【図4】 卷一一（第12冊） 卷頭：五山版



【図5】 卷一九下（第22冊）26ウ：五山版の補入、27オ：元刊本

【図4、5】から分かるように、本資料では極細字の仮名抄が大量に書き入れられている。巻一、二には仮名の抄文は殆ど見られず、漢文の書入れが僅かに見られるのみである。仮名の抄文は、巻三以降次第に増えて、巻一一あたりでは【図4】のように上欄、下欄に殆ど隙間なく書き込まれた状態になる。

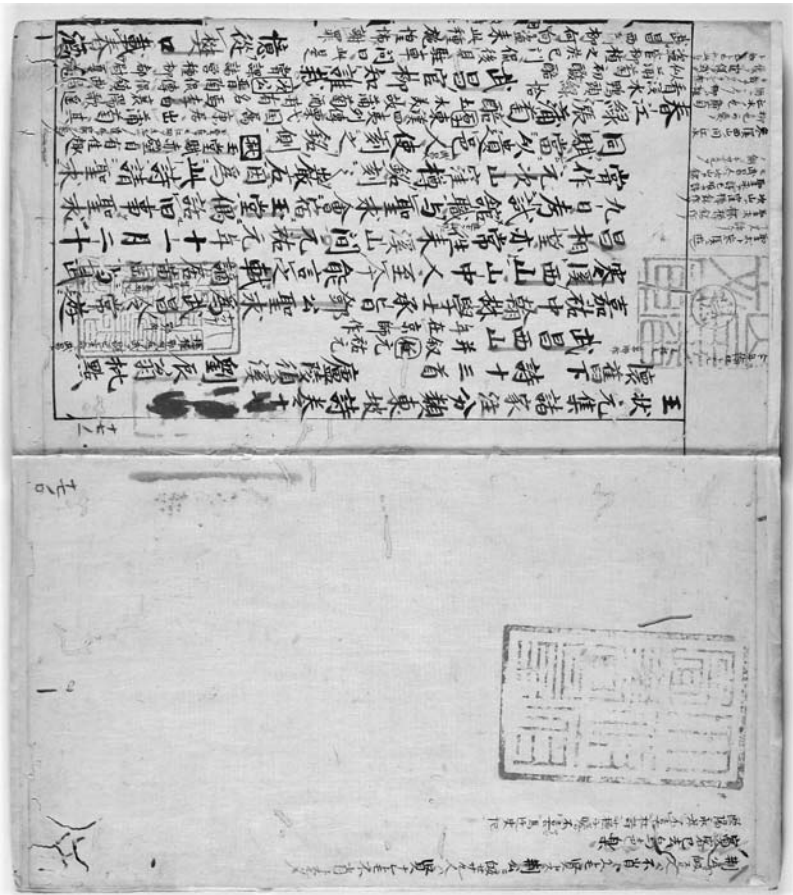
この極細字の仮名抄の書入れは、鈴木（一九七六）、堀川（二〇一五）が、巻末の識語【図1】に基づき、文英清韓が文叔清彦から「東坡詩」の講義を聞いた際に書き入れたものと推定している。同じ識語から、この講義は、天正一三（一五八五）年に始まって天正一九（一五九一）年に終わっていることも分かる。講義は、断続的に行われたものと見られる。仮名抄の分量が後半に行くほど増えていくのは、伝授を受ける清韓が、講義が始まった頃は伝領した本への書入れを躊躇していたが、後には、仮名の抄文を存分に書き入れていったことを示す。

（三）補写と匡郭内の切り抜き

本資料の中心をなす元刊本が、清韓が伝領した時点でかなり損傷が進んでいたことは、次頁【図6】のように、巻頭の一丁が補写されたり、次々頁【図7】のように刊本の匡郭内を切り抜いて、別の紙（台紙）に貼り付けて仮名抄文を書き入れたりした箇所があることから分かる。巻一七（第18冊）、巻一八上・下（第19・20冊）の三冊は、全てこのように、匡郭内を切り抜いて貼り付けた台紙に仮名抄が書き入れられている。

補写は、他の冊でも巻頭や巻末を中心に見られるため、刊本の傷みが激しい部分を書写で補ったものだろう。

また、刊本の匡郭内を切り抜いて台紙に貼り付け、仮名抄を書き入れるという形態は他の抄物にも例があるが⁽⁶⁾、それらでは全巻が同じ形態である。本資料は、特に傷みが激しい冊について、この方法をとったものと思われる。



【図6】 卷一七（第18冊）巻頭：清韓？による補写「十七」に重なる墨筆が印「天得菴」の抹消痕である。



【図7】 卷一七（第18冊）1ウ：補写、2オ：匡郭内切抜き、台紙への書入れ

(四) 裏打ちの回数と時期

現状、本資料は少なくとも三度の裏打ちによる補修を重ねている。【図8】は、清韓の書入れが元刊本からはみ出している箇所、清韓による仮名抄文の書入れ以前に、少なくとも一度は裏打ちされたことは明らかである。その後、近世以降は原紙より数ミリ大きな紙で裏打ちされており、紙の重なり具合から二度補修されたことが分かる。現状から、加點・書入れと補修の順は大よそ次のとおりと推測される。

〔本資料の加點・補修の経過（推定）〕

（南北朝期～室町期）朱筆訓点↓墨筆訓点

←？裏打ち

（室町末期～清韓伝領時）裏打ち①・化粧断ち

←

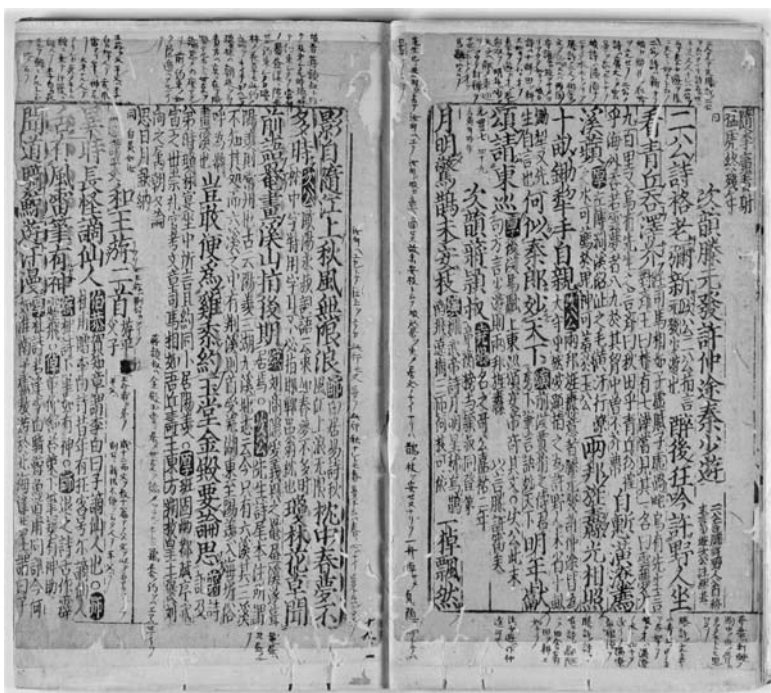
（右 同）清韓による墨筆仮名抄（？墨筆訓点）

←

（？近世～岸和田藩収蔵時）裏打ち②（縦二五・〇糲強）

←

（右 同）裏打ち③（現在の装丁、縦二六・〇糲弱）



【図8】 卷一九上(第21冊) 2ウ・3オ：台紙への書入れ抄のはみ出し

【図8(部分)】



以上のように、本資料は、仮名抄文を書き入れた清韓によると推測されるものも含めて、幾度も補修を経て、伝えられてきたことが分かる。現状からは、五山版や書写で補ってでも、元刊本を残して伝えたいという強い意志が窺われる。なお、複数回の補修によると思われる乱丁、落丁が一部に認められる。

西野（一九六四）で示されるように、「王状元本」は宋版以降も続々と日本に渡り、日本でも五山版や近世以降の版本が作られている。本資料がこのように大切にされたのは、「坡講」の伝授・伝領の正統性を保証することに加えて、稠密に施された訓点、五山僧の東坡詩の訓みを伝えるものとして近世以降も重んじられたためだろう。

本資料に施された訓点について、鈴木（一九七六）は、朱筆と墨筆は別筆で、朱筆の上から墨筆で記した箇所が見られることから、朱筆のほうが先立つことを指摘している。詳細な検討は今後の課題だが、朱点の上に重なる墨点のほう、東福寺本「四河入海」に引用される本文に施された訓点と一致する。また、仮名抄は、漢文学研究の立場からは「四河入海」を出るものではないと述べられ（堀川二〇一五）、日本語学の立場からは独自の内容を含むと指摘される（柳田一九七七）。内容は大きく変わらず言語表現だけがわずかに変わるとい、日本語の史的变化を観察するには望ましい資料である。

おわりに

以上、本稿では、大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』について、現状（本の状態）から、室町期の五山における東坡詩の伝授・伝領に用いられた本であることを推定した。

今回は触れることが出来なかったが、本資料は室町期末の言語資料としても貴重である。

(2) 其語老成シテヲトナシク、周諄タルソ。詩語カワロベシクナイソ。
〔東坡先生詩・一九下23ウ〕

〔参考〕「四河入海」の当該箇所〕

其語老成シテヲソナシウハナイソ。

〔「四河入海」古活字版一九ノ443才〕

(3) 鞏、平生遊タル処ノ旧舎ニハ壁ニ墨カツイテアルソ。
〔東坡先生詩・一八下17ウ〕

〔参考〕同〕

王鞏、平生遊タシ旧業ナレハ、壁ニ遺墨ノアルマテ、有ルソ。
〔「四河入海」古活字版・一八ノ452才〕

(2)の形容詞「わろべしい(わらべしい)」について、『日本国語大辞典』は一八世紀初頭の例を初出とする⁽⁷⁾。(3)の「墨がついておる」に関しても、現在の西日本方言で「壁に墨、ついとる。」はごく自然な表現だと思われるが、従来の研究では、当期はまだ継続相を表す「テイル」の類は未発達とされている。

本資料は劣化が著しく、貴重な言語資料が失われる恐れがある。今後はできるだけ早く、精細な画像データの作成、および、朱墨の訓点と仮名抄文の翻刻を進めたい。

従来の言語資料としての抄物研究では、講義との関係が注目され、より成立を遡れるもの、講者の講義に近い時期・場所・人間関係で作成されたことが明らかであるものが、日本語史資料として優先的に発掘・整備されてきた。柳田(一九七七)でも、書入れ仮名抄が仮名抄物の原初形と考えられる点を重視される。

言語資料としての価値から抄物を計るとすれば見逃せないのが、一六世紀以降、抄物自体が継承すべき「原典」となったと考えられる点である。この頃には、先行抄に基づく講義が行われたり(清原宣賢の口語抄、本資料の書入れ

仮名抄など。例えば、國學院大學図書館蔵「木杯余瀝」は先行の木杯＝椿庭海寿の注釈から落ちた雫と称する）、複数の先行抄を編纂した抄物が作成されたり（「四河入海」、「笑雲和尚古文真宝抄」、林宗二抄の「山谷抄」「東坡抄」「杜詩抄」など）するようになる。従来から、清原宣賢の講義の手控「聴塵」類と、宣賢講の聞書（さきがき）である林宗二の抄物を比べる考察は行われている。今後は、聞書を手控とした本資料のような抄物について、元の聞書（本資料の仮名抄が主に依拠するのは、「四河入海」の桃源瑞仙講一韓智翹聞書部分か）とそれを手控とした講義の聞書と比較したり、編纂抄物について編纂の元となった抄物と比較したりといった手法が、個々の言語事象の記述でも用いられるべきであろう。そのための資料整備が望まれる。

幸い、本資料を含めた東坡詩の抄物は、東坡詩の受容層が五山僧に限らず、公家や武家にも広まったために（堀川二〇一五）、抄物成立史では最末期の編纂抄物が複数残る。林宗二・宗和抄「東坡抄」（二五卷三〇冊）や米沢市立図書館蔵『増刊王状元集注分類東坡先生詩』（朝鮮活字本、残七卷八冊）などである。これらは、本資料が伝える桃源瑞仙を通じて伝わった訓点・注釈とは、別系統の注釈も含む。今後、これらについても可能な限り調査していきたい。

注

- (1) 本資料の詳細な調査、読解がなされてこなかったのは、書入れられた仮名抄が極細字で、現物調査でなければ判読しづらいことが一因と思われる。現在は、言語調査に耐えうる質のデジタル画像の閲覧・複写が可能になっている。また、悉皆調査が躊躇される要因には、東坡詩の作品数の多さとそれに伴う注釈の分量の多さ（王状元集注本で全二五卷、「四河入海」は写本五〇冊・古活字版一〇〇冊）も一因であろう。

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』の書誌的考察

- (2) 堀川(二〇一五)の指摘は、文英清韓の坡詩講の間書(佐藤道生氏蔵、堀川二〇一〇に翻刻)が存する第一〜四二首(うち、2〜7、19〜26首を欠く)について述べられたものである。
- (3) 以下、本稿では、大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』を、「東坡先生詩」と略称する。
- (4) この指摘は、岡見正雄氏蔵の古活字版「四河入海」に挟み込まれた紙片の文章に基づく。
- (5) 文英清韓は、豊臣秀頼の依頼で方広寺鐘銘文を選した学僧である。鈴木(一九七六)は、大阪の陣に際し天得庵が廢されたため、本資料が流出した可能性が高いとされるが、堀川(二〇一五)は、清韓がこの事件で追放されたのち間もなく許されて、元和六(一六二〇)年に「東坡詩」の禁中講義を行っていたことを明らかにしている。本資料の伝来は再考を要する。
- (6) 柳田(二〇一三)では、旧お茶の水図書館『虚堂和尚語録』(五山版、三卷統一卷四冊)について紹介される。管見でも、米沢市立図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』(朝鮮活字本、残七卷八冊)が同じ形態である。両書の作成には、同じ室町末期の妙心寺の僧、南化元興(一五三八〜一六〇四)が関わっていると考えられる。柳田(二九九八)は、抄物の出発点に書入れ仮名抄を位置付けるが、抄物の終末期にも、本資料や右の二抄のような書入れ仮名抄が出現したことになる。
- (7) 「わろべしい(わらべしい)」は、現在方言でも各地に認められる。名詞「わらべ・わろうべ」から接辞「〜ラシイ」によって派生した形容詞「わらべらしい」は、「日葡辞書」に記載されており(山本二〇一二)、「わろべしい(わらべしい)」の初出がこの時期まで遡れても不自然ではない。

調査資料・使用したテキスト

- 大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集注分類』東坡先生詩』：原本およびデジタル画像 ○東福寺本「四河入海」
…京都大学大学院文学研究科図書館蔵、紙焼写真 ○林宗二・林宗和抄「東坡詩抄」：原本および、京都大学文学部国語学国
文学研究室蔵デジタル画像 ○米沢市立図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』(残七卷付紀年録一卷)：原本
○「四河入海」古活字版：『抄物大系』勉誠社

参考文献

- 鈴木博（一九七六）「四河入海について」『抄物資料集成・第七卷 解説索引篇』清文堂出版
- 柳田征司（一九七七）「書込み仮名抄一斑」『愛媛大学教育学部紀要 第2部人文・社会科学』9
- 柳田征司（一九九八）「書入れ仮名抄」『室町時代語資料としての抄物の研究』清文堂出版（第一章第四節、初出…『国語資料としての「書込み仮名抄」』『武蔵野文学』24、一九七六年）
- 柳田征司（二〇一三）『日本語の歴史4 抄物、広大な沃野』武蔵野書院
- 西野貞治（一九六四）「東坡詩王状元集注本について」『人文研究（大阪市立大学）』15―6
- 芳賀幸四郎（一九五六）『中世禅林の学問および文学に関する研究』日本学術振興会
- 堀川貴司（二〇一〇）「東坡詩聞書 解題と翻刻」『花園大学国際禅学研究所論叢』5
- 堀川貴司（二〇一五）『続 五山文学研究 資料と論考』笠間書院
- 山本佐和子（二〇一七）「モダリティ形式「ラシイ」の成立」『日本語文法史研究』1

〔付記〕

貴重な資料の閲覧・調査をご許可下さり、デジタル画像をご提供下さいました大阪府立中之島図書館に、記して感謝申しあげます。また、米沢市立図書館、京都大学大学院文学研究科図書館、京都大学文学部国語学国文学研究室にも資料の閲覧・複製提供のご助力を賜りました。

本研究は、JSPS 科研費 JP 17K13464 の助成を受けたものです。